

2022 Eye's  
新潟ここだけ物語

大河津分水路

想い | つくる | 伝える

[ F u u d ]  
2022  
夏号  
—季刊—

未来への先手

がんばろう ● ニッポン!

Take Free  
ご自由にお持ちください

大河津分水路の洪水調整機能の要になる洗堰。2000年(平成12)に通水し、24時間365日静かに働き続け、越後平野を守ってきた。これからも住民の命と財産を守り続ける大いなる土木施設である。



111  
今回の取材テーマ  
大河津分水サイクリング

カメラマンの  
取材メモ [6]  
6  
カメラ



新潟市から長岡方面へ行くとき、大河津分水河口から3キロほど上流に架かっている。自分の姓と同じ「渡部(わたべ)橋」をいつも渡る。私はこの橋からの風景が好きだ。左にゆるくカーブしていく水路とその先に見える野積橋。そして隙間からのぞくように、ちょっぴり日本海と佐渡が見える。

今回の取材テーマを機に、この辺りをじっくり見ようと、サイクリングを思い立った。渡部橋の近くで車を止め、折り畳み自転車を出して、土手道をスタート。改修工事のため、いろいろな場所に人、車、重機が見える。左岸の山は、道路の拡幅でいずれ無くなってしまうが、今はまだ高く、山頂の道路をダンプカーがアリの行列のように走っていた。

撮影しながら一回りして、また渡部橋に戻った。そういえば父から、先祖はこの近くの渡部集落だと聞いたことがある。「集落巡りでもしてみるか」と、左岸の土手を下りて渡部集落へ。住人に聞くと、元の集落は大河津分水のため移



転、右岸と左岸の2つに分かれたという。そういうわれると対岸にも集落がある。今度はそっちに向かってペダルを踏んだ。

行ってみると、静かな集落に一軒の骨董品店があった。中務(なかつかさ)さんという50代のご主人が出てきて、話を聞かせてくれた。さすが古い物を扱う人だ。大河津分水のウラ話が次々出てくる。「江戸時代に幕府に請願に行つたのが、なぜ洪水で困って

いる内陸ではなく、海岸に住む寺泊と野積の権力者だったのか」とか「なぜ分断された渡部集落の間に渡部橋が架かず、離れた場所に架けられたのか」など、どこにも書かれていなかった話に時間が経つのも忘れて聞き入ってしまった。

気が付けば夕方。中務さんにお礼を言って、また渡部橋に戻った。大好きな風景の方角にちょうど夕日が沈んでいった。

写真、文章／スタジオF(t) 渡部 佳則

①渡部橋から見た、佐渡に沈む夕日。野積橋の前に工事用の橋やクレーンが見える。

②ゆっくり見て回るには、自転車は最高の乗り物。

③2つに分断された渡部集落の右岸側。川を挟んでも住所は同じ「燕市渡部」。自治会も一緒だそうだ。

ふうど 2022夏号 vol.57

企画編集 ふうど編集室  
発行人 高橋 佑  
取材編集 渋川綾子  
佐々木聰  
写 真 渡部佳則  
デザイン 斎藤道司(株)ディモルギア  
題 字 小林 翠

#### 編集後記

小学生の頃、夏休みの多くのを信濃川沿いにある親戚の家で過ごしていた。そんな夏のある台風の夜。急いで雨具を付け暴風雨のなかへ駆け出で行った叔父の険しい顔と、大きな田舎家に子どもたちだけが取り残された心細さが、今号の取材中に蘇った。その集落は、いわゆる洪水の常襲地帯にあり、叔父は漏水し始めた堤防に土嚢を積むために走って行ったのだった。そのDNAからか雨音には敏感である。しかし令和元年、台風19号で千曲川が氾濫した時は、雨音の異常さを覚っていたが、それほどの大被害になるとは思っていなかった。まして、その洪水が大河津分水路まで押し寄せ史上最高の水位に達し、分水地域に避難勧告が出ていたことまで当時は知らなかった。今年で通水100周年を迎える大河津分水路だが、過去に数回ほど周辺住民を震撼させたことがあったという。母なる大河と人間が共存する途に、完全無欠はないようだ。それでも課題解決のために最新の知恵と技術が集まっている現実を、この夏にこそ見つめたい。(渋川)

#### 発行所

まごころ印刷の  
株式会社 タカヨシ ふうど 編集室

SUSTAINABLE GOALS 私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800  
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884  
■上越営業所 / 〒943-0805 新潟県上越市木田2丁目1番1号 上越セントラルビル5階2 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800  
■仙台営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目347 上杉オオカミビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712  
■名古屋営業所 / 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社1丁目79 第六名昭ビル6A TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081  
■オフィシャルサイト / <http://www.takayosi.co.jp>

#### 「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】中央区>ANACランプラザホテル新潟、駅前オフィスNII GATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中本店など工房、朱躑々美、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、りゅーとひあ新潟市民芸術文化会館<東区>桑名病院、パティスリー・カフェオーレアン <西区>新潟ふるさと村、新潟市立亀田図書館、北方文化博物館 <西蒲区>カーブドックス、ドーナ・ショウ <秋葉区>カフギャラリー・やまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館<新潟市>加治地区公民館、紫雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市文化会館、新發田市立図書館、農浦地区公民館 <聖籠町>聖籠音楽の湯ざぶる <村上市>イヨボヤ会館、村上市観光協会<長岡市>新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、やまとこし復興交流館おたら <燕市>分子ビズターサービスセンター<出雲崎町>越後出雲崎天領の里 <湯沢町>吾国觀光館 越後湯沢温泉 【南魚沼市】桜苑<佐渡市>SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館<東京都>八王子区>表参道・新潟館ネスバズ <中央区>ブリッジにいた <千代田区>新潟市東京事務所【東京都】八王子区>表参道・新潟館ネスバズ <中央区>ブリッジにいた <千代田区>新潟市東京事務所

本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス  
バイインダー  
RICE INK  
針金・糊・加熱が不要な  
製本方法を採用し、  
リサイクルや怪我の危険へ  
配慮しています。

この印刷物は環境にやさしい  
米ぬか油を使用したライスインクで  
印刷しています。



日本は、この夏で満百年を迎える。その間、分水路より下流の信濃川流域は、安全が保たれ、水害の恐ろしさは古老たちの昔語りになりつつあった。

しかし近年の気候変動により、思わぬ災害のリスクが高まっている。

日本の近代土木史に燐然と輝く、大河津分水路が初めて通水して、この夏で満百年を迎えるにあたり、あらためて役割を学習してみた。

大河津分水路は、信濃川の河口から上流約六十キロメートルの地点にある。その日も分流地点の川の眺めは、穏やかで壮大だった。その大景観から、かつてそこに平野があり、集落が築かれ、さらに縄文時代にも人びとの暮らしがあったことを思い起すことは難しい。また大型の土木機械がない時代、延べ一千万人の人々が平野を掘り山を削り、十三年がかりで分水路が開削された跡を、川筋で見ることはできない。そして百年前、人工の川に大河の命が流れ込んだ世紀の瞬間を目撃した人は、もう誰もいない。それは大正十一年（一九二二）、八月二十五日早朝の出来事だった。折から台風による暴風雨で信濃川の水嵩がピークを迎える時刻に、本流と分水路を仕切る堤防が爆破され、本流の一部が流路を変え、急勾配の分水路に激流と化して水は川幅いっぱいに広がり河口へと急速に洗堀に向かった。本流は堀の斜面を下り、水しぶきと高い水音をあげ躍動する命の輝きを放っていた。

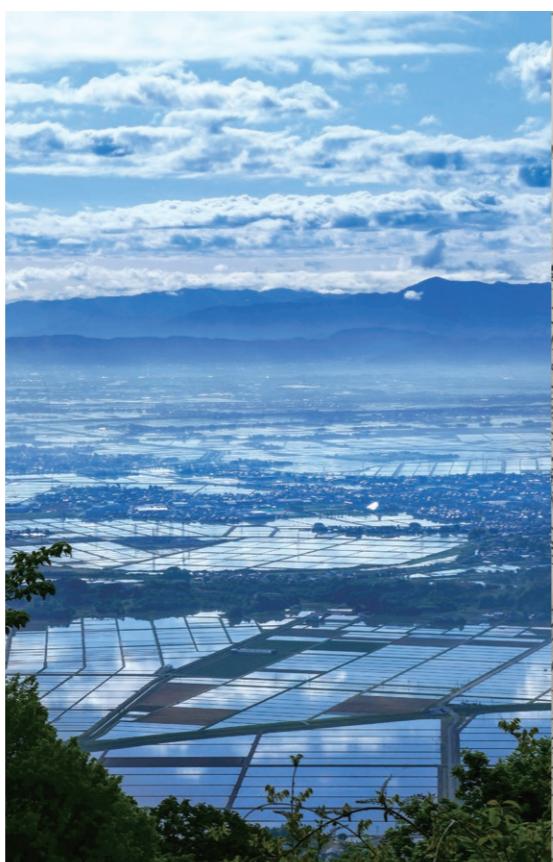
竣工当時、東洋一と謳われた大河津分水路の第二期工事が着手されるまで糾余曲折の時代が長く続いた。享保年間（一七一六～三五）、寺泊の水害は川幅いっぱいに広がり河口へと急速に洗堀に向かった。本流は堀の斜面を下り、水しぶきと高い水音をあげ躍動する命の輝きを放っていた。

竣工当時、東洋一と謳われた大河津分水路の第二期工事が着手されるまで糾余曲折の時代が長く続いた。享保年間（一七一六～三五）、寺泊の水害は川幅いっぱいに広がり河口へと急速に洗堀に向かった。本流は堀の斜面を下り、水しぶきと高い水音をあげ躍動する命の輝きを放っていた。

大河津分水路の改修工事中に出土した、100年前の工事で使われていたトロッコ。

弥彦山の頂上付近から見た現在の越後平野。大河津分水路の完成後、水環境が安定し、たくさんの放水路が整備され平野は瑞穂の国に生まれ変わった。

約200年前、大河津分水路ができる以前の越後平野。信濃川と阿賀野川が運ぶ土砂で形成された平野は土地が低く日本海に注ぐ河口がふたつしかなく、平野内では大河とそれに繋がる中小の河川が蛇行して流れ、大小の潟湖が存在し、ついに排水が悪く、大雨になると水の逃げ場がなく水害が起きやすい地形だった。1817年（文化14）越後全図の一部に加筆。（柏崎市立図書館所蔵）



怒りと嘆きが表現され、良寛の勧哭さえ聽こえてくる。また良寛が托鉢作のための用排水で水争いが絶えない地域だった。この様子を『村肝の水の騒ぎ』と詠っている。

良寛が壯年期を過ごした江戸後期は、越後平野の新田開発が急速に進んだ結果、水害の起きやすい場所でも水田が作られるようになり洪水の発生件数が増えていく時代にあたる。その状況を見かねた地域の有力者たちが排水用の水路の新設や新川の掘削などを幕府に請願し各

水の周辺は信濃川とその支流の西川や中ノ口川が入り組んで流れ、稻作のために用排水で水争いが絶えないと友人を訪ねて歩いた地蔵堂や分水の騒ぎ』と詠っている。

良寛が壮年期を過ごした江戸後期は、越後平野の新田開発が急速に進んだ結果、水害の起きやすい場所でも水田が作られるようになり洪水の発生件数が増えていく時代にあたる。その状況を見かねた地域の有力者たちが排水用の水路の新設や新川の掘削などを幕府に請願し各

水害が起きる度に地域住民から分水計画が出されたが、関係する流域が広く、しかも中小の藩領が複雑に入り組んでいたため、その調整が難しく総合的な治水対策が講じられることもなく歳月だけが過ぎていった。水害が多発する地域の農民たちは家族を他国稼ぎに出したり、農地を手放すなど次第に疲弊していく。良寛の代表的な句、「この里には手毬つきつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし」は、こうした時代背景のなかで幼少期を過ごしている女の子たちに、やがて訪れるであろう過酷な運命を思いやって作られた

江戸時代の絵図がある。文化十四年（一八一七）に描かれたもので、当注ぐ阿賀野川のみで、平野内には大きな潟湖が点在し、本支川の流域はどこでも低湿地の排水不良に悩まされる地形だったことがわかる。この絵図が描かれた頃は、清貧な生き方と無垢な人間性で現代も大勢の人々に慕われている江戸末期の禅僧良寛が、全国におよぶ仏道修行の旅を終え越後に戻り五合庵に暮らしていた時期にあたり、洪水の常襲地で暮らす人びとの苦労を身近にしていた。新潟で海に注ぐ信濃川と松ヶ崎で注ぐ阿賀野川のみで、平野内には大きな潟湖が点在し、本支川の流域はどこでも低湿地の排水不良に悩まされる地形だったことがわかる。この絵図が描かれた頃は、清貧な生き方と無垢な人間性で現代も大勢の人々に慕われている江戸末期の禅僧良寛が、全国におよぶ仏道修行の旅を終え越後に戻り五合庵に暮らしていた時期にあたり、洪水の常襲地で暮らす人びとの苦労を身近にしていた。『この世に神があるなど疑いたいほどだ（水上勉による現代語訳）』と良寛にしては強い調べで詠った漢詩の一節がある。「寛政甲子夏」の書き出しから始まる長い漢詩である。この詩には良寛が見た洪水の様子と、豊作を期待して丹精込めて育てた農作物を突然の洪水で根こそぎ持つて行かれた農民たちの遣り場のない

大河津分水路の改修工事中に出土した、100年前の工事で使われていたトロッコ。

# 晴れた日の大洪水

つくる 踏ん張った分水路

○ 大河津分水路は、河口から約六キロの上流、信濃川と日本海がもっとも近づく地点にある。高いところから低いところに流れる水の性質を利用して、放水路の水面勾配を本流の約八倍と急勾配にして本流から分水路に水を導く原理で作られている。ただ、そのままでは上流から流れ下る全ての水が分水路に向かうため、可動堰を設け水量を調節している。また本流側には洗堰を設け、平常時には常時一定の水量を下流に流し、洪水時には堰を完全に閉じ洪水が下流に行かないようゲート調節している。

この信濃川が本流と分水路に分かれる分流地点の右岸側に、良寛も歩いた地蔵堂の街並みがのびている。それは巨大な分水路を背負う川岸の町のようである。町は曲がりくねった通りに沿い、長い歴史を留める神社仏閣やレトロな建物が点在し、趣きのある風情を漂わせている。そんな落ち着いた町に、軒並み大河津分水路の通水百年を祝う真紅のかさを添えていた。

## 母なる川のほとりで

地元ならではの話をもっと聞きたくて信濃川大河津資料館の解説ボランティアをしている小黒憲雄さんに話を伺った。小黒さんは分流地で生まれ育ち、「母なる信濃川」はごく身近な存在である。また平成十六年の新潟・福島豪雨で刈谷田川が氾濫した時、役場の職員として住民を守りたい一心で奔走し、さらにその直後に中越地震にも見舞われた二~三年の間は、地域の

幟がはためき、分水路と地元住民が密接な関係にあることが窺えた。その盛り上がりは静かな熱気を呼び、ハード面だけ見てしまいがちな無機質な構造物に、人間的な柔らかさを添えていた。

「その日は台風一過の晴天に恵まれ、和島に行くのに与板橋を渡った時にいつもより川の水位が上がり、気にしていましたが、それほど気にしていませんでした。用事を済ませ帰宅しようとしたお昼頃に橋を渡った時、さらに水位が上がり、堤防から数歩のところで川の水に手が届きそうになっていた驚きました。その瞬間、子供の頃に抱いた恐怖心が蘇りました。大河津分水はそれまで三年から五年に一回くらいの割合で、洪水級の出水はありましたが、それが蘇りました。大河津分水はそれまで三年から五年に一回くらいの割合で、洪水級の出水はありませんでした。その頃、燕市から分かれり安心しきっていたのですが、その時の川の様子は過去の経験をはるかに上回るもので、ほんとうに恐ろしかったです」。その頃、燕市から分

に移った。

復旧復興に追われたという。当時の被災状況を後世に伝えるため数年がかりで編集した中之島の水害の記録集を前にし、話は令和元年の台風十九号による千曲川氾濫後に起きた大河津分水路の危機的状況



NPO法人信濃川大河津資料館友の会の副理事長である小黒憲雄さん。

新潟 ここだけ物語 **ふうべ**  
分水路の堤防沿いに植えられた桜並木の開花に合わせライトアップされた洗堰(上)と可動堰(下)。人知れず越後平野を守り続けているふたつの堰が、一年に一回、より莊厳さを増す瞬間である。

水地区に避難勧告が出され、市の広報車や防災無線は大音量で緊迫した状況を伝え、大河津分水路の周辺は騒然としていたという。「当時は令和の大改修事業が始まっていますが、そんな記録的な洪水でも工事の設備などに大きな被害がなかったようで、さすが国内一級を誇る施設だと思いました」。安全があたりまえになっている新潟市民には窺い知れないと、少しうまく言葉をこねて教えてくれたのは小黒さんで、地域に起きた水害について語り継ぐ大切さを感じた。中之島中条地区は蛇行した川が対岸にぶつかり、その勢いで水害が強まる位置にあり、田畠の土壌は粒の小さな川砂で形成されているという。

小黒さんが分水路の記録的な増水を目撃した、その日。令和元年十月十三日、施設を維持管理する人たちは、どんな思いで洪水を見ていたのか。信濃川河川事務所大河津出張所の須山聰さんに聞いてみた。

河川事務所の資料によれば十三日の深夜から分流地点の水位が上がりはじめ、午後三時頃には氾濫危険水位を一メートルも超えてピークに達していた。その時の様子を「平日は、平常時の川幅のおよそ二・五倍ほど水面が広がり、堤防際の樹々は逆巻く濁流に呑まれていました。大河津橋下流にある越後線の鉄橋は、橋脚部分が完全に水没し膨大な水量を物語っていました」。千曲川の洪水が約半日後に大河津分水路に到達することは、過去の経験で予測でき、それまでに堤防付近の巡回や施設の点検など念入りに行い職員全員が徹夜で待機していたそ

うだ。「水位の上昇がピークに達した前後の十二時間は、いつ何が起こるかわからない危険な状態が続き、情報提供や電話対応に追われながら、心の内では何事も起こらないよう必死に祈つてしましました」と打ち明けてくれた。「そんな堤防が切れてもおかしくない切迫した状況で、堤防に大勢の見物人が集まってきたまして、もし堤防が決壊したら人命に



北陸地方整備局管内の治水施設で長い経験を持つ大河津出張所長の須山聰さん。



**インフォメーション**

**信濃川大河津資料館**  
〒959-0124 燕市五千石  
TEL 0256-97-2195

**国土交通省 北陸地方整備局  
信濃川河川事務所 大河津出張所**  
〒959-0123 燕市大河津  
TEL 0256-97-2121

**国土交通省 北陸地方整備局  
信濃川河川事務所**  
〒940-0098 長岡市信濃1-5-30  
TEL 0258-32-3020

**読者の声 ~前号を読んで~**

**新潟の風土と人が生んだ精神**  
(もったいない)は今や世界で通用する日本語のうちの一つ。そのルーツは、もしかすると新潟かもしれない。自然と人の共生を象徴するソウルフード。平安時代からの伝統の食文化を未来に引き継いでゆくのも新潟ならではの『風土』と『人』がいるからなのですね。  
(佐倉市 80代男性)

大河津分水路を上空から見た様子。上流から日本一長い信濃川が川幅を広げて流れ下り、分流地点で幅を狭め新潟方面に向かう様子がわかる。  
北陸地方整備局信濃川河川事務所提供(平成30年8月8日撮影)



に設置する工事が進んでいます」。この鋼殻ケーソンは総重量四五〇トンの、中が空洞になっている巨大な立方体で、九州地方で製造し柏崎港を経由して現場まで引船で曳航されてくる。河床の据付け作業は、陸上の建設機械と水中の潜水夫による連携で行われ、据付け後に枠のなかにコンクリートを入れて固定する。現河道部で九函の設置が計画さ

れ、現在は三函が設置済みだそうだ。河床が低下すると、どんなに立派な施設でも基礎が不安定になり倒壊のリスクが発生し、また地滑りを誘引する要因にもなるという。

### 令和でも注目的

それにしても工事が行われている分水路の下流部は流れが最も激しい場所。そんな環境で工事が行われているなんて、頼もしいが素人目にはリスクに見えるが。「もちろん工事は安全第一ですから出水状況によって作業を中止する場合があります。でも基本的には雪解け時や梅雨時期にあわせて工事計画を立てています」。その他に拡幅した河口部の全幅にあわせ野積橋の架け替えも計画されている。なお掘削によって出土は、燕市の圃場整備事業などで活用されるそうだ。

この改修事業の総事業費は、約一七六五億円。その毎年度の予算規模は北陸地方整備局管内の十五河川の河川整備費の多くを占めるほど大規模な事業だそうだ。全国からの視察も多く、若杉さんは取材した週にも土木関係者を対象にした現地研修の案内を控えていた。

この令和の大改修事業の事業立案と事業計画検討のための調査・検討に関わる重責を担つている若杉さんは、どんな気持ちでいるのだろうか。「日々勉強です。とくに大河津分水路は歴史がありますので、その方面も熟知しなければいけません。全國的にも注目度の高い事業なので、先輩たちが築いた功績に恥じないよう使命感をもって職務を全うしたいです。それが先人たちの苦労に報いることになり、先人の志を未来に繋ぐことになると思います」。信濃川河川事務所では、分水路の工事で命を落とした人たちの慰靈式を毎年四月に行い、故人の無念を偲ぶとともに、職員の気持ちを引き

え、分水路が新潟の風土と先人たちの勁い意志から生まれた大きな遺産であることを再認識した。百年間、越後平野の安全を守ってくれたことを素直に感謝し、時代とともにアップデートしている姿勢から柔軟な心を学びたい。

令和の大改修事業の概要をわかりやすく説明してくれた若杉さん。



### 伝える 二百年事業の始まり

#### 大正と令和をつなぐ風景

現在、大河津分水路の河口付近



分水路河口部で現在行われている工事の様子。改修工事が終われば、永遠に目にすることのない今だけの貴重な現場風景。現場脇には工事風景を見渡せる「にこみえへる館」があり自由に見学できる。

### ふたつの課題

現場を見ただけで、大規模な事業であることは理解できるが、せつかく通水百年に巡りあえたことを機に、改めて大河津分水路の仕組みと改修事業の概要を信濃川河川事務所計画課の若杉匠さんにレクチャーしてもらう。「大河津分水路は、信濃川の洪水を越後平野に入れる前に、日本海に逃がすために建設された約十キロメートルの人工の川です」。そして現在の分水路が抱え

た当時の技術力では、それ以上に川幅を広げることができなかったのです」。もうひとつ課題は「放水路の河底の低下を抑制する施設の要である「第二床固」の経年劣化で、河床が低下するリスクが生じていることです。床固めとは、水の勢いによつて河床が削られないよう河底の地表を固定する設備で、今回の改修では新しい第二床固を整備しています。整備の最初の工事として頑丈な構造をもつ鋼殻ケーソンを河床

地滑りが発生し工事が難航しました。当時の技術力では、それ以上に川幅を広げることができなかったのです」。もうひとつ課題は「放水路の河底の低下を抑制する施設の要である「第二床固」の経年劣化で、河床が広いが、出口が狭くなるためいるかのようだ。陸や山を掘削し川幅を広げることは昔と変わらず、ただ使われている建設機械が違うことと、通常の洪水調整機能を保ちながら川のなかで工事が行われていることが決定的に違っています。当時の人たちが、時代を先駆け奮ったように、令和のビッグプロジェクトを前にして人間の底知れぬエネルギーの総量に興奮してしまった。

作業ヤードが設けられ、その上で大型の建設機械が長い腕を空に向けていた。それらの光景は、まるで第二次大河津分水路の工事を再現しているかのようだ。陸や山を掘削し川幅を広げることは昔と変わらず、ただ使われている建設機械が違うことと、通常の洪水調整機能を保ちながら川のなかで工事が行われていることが決定的に違っています。当時の人たちが、時代を先駆け奮ったように、令和のビッグプロジェクトを前にして人間の底知れぬエネルギーの総量に興奮してしまった。

# 水流のなかの建設現場